OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ろう児のための日本手話による絵本読み活動 : ろう児と聴母のより豊かなコミュニケーションを目指して
Author(s)	田中, 瑞穂; 佐野, 愛子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2017, 13, p. 92-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪論　文≫

ろう児のための日本手話による絵本読み活動
－ ろう児と聴母のより豊かなコミュニケーションを目指して －

田中 瑞穂（北海道札幌聾学校）
tanaka.saturo@hokkaido-c.ed.jp
佐野 愛子（北海道文教大学）
aikosano@do-bunkyodai.ac.jp

Reading Picture Books in Sign Language to a Deaf Child
Building Enhanced Communication Between the Deaf Child and the Hearing Mother

Mizuho Tanaka & Aiko Sano

要　旨

聴覚障害のある乳幼児は音声言語獲得が困難であって、その言語発達および認知発達を支えるためにできる限り早く自然言語である日本手話を導入することが重要となる。しかし、聴覚障害児のうち大多数が聴こえる親の元に生まれるため、親が子どもに手話で話しかけることは容易でない。こうした状況の一助とすべく本研究では、日本手話話者であるろうの講師による絵本読み活動の機会を特別に設け、その活動下での母子コミュニケーションの発達について観察した。対象児が生後7ヵ月だった時点からの2年間の観察の中で、対象児の絵本読みへの関心がはぐくまれたばかりでなく、母親がろう講師と子とのコミュニケーションの取り方をみて学ぶ場面や、母親とろう講師の会話から子が新しい語彙を獲得する場面などが観察された。これらの観察をふまえてこの活動がろう児と聴の母親との間のコミュニケーションに与えうる影響について考察する。

Abstract

Acquiring a spoken language can be a challenge for hard of hearing or deaf children. Therefore it is of crucial importance to expose them to natural sign language as early as possible. However, since the majority of such children are born to hearing parents, it is often difficult for the parents to communicate through sign language. Given such a situation, special intervention classes were conducted for a deaf child and her mother in which a natural signer read books for the child. This study reports the observation of the development of communication between the deaf child and her hearing mother.

The classes were held over a period of two years, from the time the child was seven months old. During that period, the child developed an interest in having someone read books to her. Furthermore, it was observed that the hearing mother learnt how deaf adults communicate with deaf children. The child was also found to be acquiring new vocabulary by watching the conversations between her mother and teacher. The possible impact of such intervention on the development of communication between a deaf child and a hearing mother will be discussed.

キーワード：ろう児、聴母親、日本手話、母子相互作用

1．はじめに

聴覚障害のある乳幼児にとって最大の問題は、そのままでは音声言語の獲得が困難なことである。こうした子どもたちの言語獲得においては補聴器装用や人工内耳埋め込み手術などで聴覚補償をしたうえで、音声言語獲得をはかることが一般的であるが、これらの聴覚補償の効果には個人差がある。聴覚によるインプットが制限されつつ音声言語以外の言語入力がない場合、母語としての言語発達は著しく停滞する。そのような状況で音声言語のみを使用するタイプのろう教育をカミンズ（2011）は、「障害児を作り出す教育的取り組み」（p.163）と断罪し、ろう児一般にみられる学力不振[1)]は、ろうであることそれ自体に起因するのではなく、思考及び人間関係構築のツールとして重要な役割を果たす言語の発達が阻害されていることによってもたらされると指摘する。なお、本稿では「ろう」は、日本手話を用いる聴覚障害者を指すために用い、また、「聴」は、聴覚障害が無い人を、「手話」は日本手話を指すものとする。

母語の能力を育てることが第二言語の習得の妨げとならないばかりかむしろ第二言語習得の強固な基盤となる、とするCummins（1979）の二言語相互依存仮説は、モダリティの違う二言語の組み合わせとなるろう児のバイリンガリズムにおいても広く支持を得てきた（Goldin-Meadow & Mayberry, 2001）。ただ、母語としての手話の運用能力を高めればそれがそのまま第二言語の書記言語へ転移するのか、という点についてはMayer and Akamatsu（2003）などから反論が提示され、さらに詳細な研究が求められている。

ろう児の言語発達における手話の役割の重要性が指摘される一方で、言語訓練にあたる医療機関においては一般に残存聴力の活用の可能性を高めるため「安易な」手話

の利用に頼らず、音声言語のインプットを増やすようアドバイスをされる。そうした中、ろう児の親達は様々な意見に翻弄されながら必死にわが子にとって最適のコミュニケーションモードを選択すべくもがいている。こうしたろう児の親たちの悩みを軽減するには、どのような場面でどのように手話を用いることがろう児の言語習得に資するのか検討する研究を積み上げていくほかはなく、これが本研究の場となる聾[2]学校における一連の研究の動機となっている。本研究は、コミュニケーションモードが一致していない母子コミュニケーション支援の在り方を模索する中、日本手話を用いた絵本読みの活動の有効性を探るために、この活動の下で聴母とろう児の母子コミュニケーションがどのように変化・発展するか観察・記述したものである。

2．先行研究

本節では幼児期における母子コミュニケーションの重要性について概観したのち、多くのろう児とその母が直面する母子間のコミュニケーションモード不一致とそれに起因する課題、およびそうした課題を克服するための取り組みについて先行研究をまとめる。

2.1 幼児期における母子コミュニケーションの重要性

岡本（2005）は幼児のコミュニケーションの特徴は、その言語活動が相手との「言葉のやりとり」の中で展開される点にあり、そうしたやり取りの積み重ねが、のちに抽象的な思考を可能にする「二次的ことば」の土台となると説明する（pp.168-170）。その意味で、特に幼児期の子どもの言語の発達において母子コミュニケーションが果たす役割は非常に大きく、対象幼児がろうであっても聴であってもそれは変わらない。日本語や英語などと同様に自然言語である手話[3]に触れる機会に恵まれるろうの親の元に生まれるろう児の言語発達は、聴の親の元に生まれる聴の子どもと大きく異なることがないことが知られている（Voltera, Iverson, & Castrataro, 2006）。

2.2 母子間のコミュニケーションモードの不一致による発達上の課題

ろう児の幼児期における母子コミュニケーションについて考えるとき、聴覚に障害を持つ子どものうち90％が聴の親の元に生まれる（廣田, 2013）点に留意する必要がある。本研究が行われた聾学校の中に設置された乳幼児とその保護者を対象とする相談室においても、2012～2015年度、定期的に通った延べ45家族全ての保護者が聴者であり、日本手話に触れた経験がなかった。自分にとっては母語ではない言語での子育て

を余儀なくされるこうした聴保護者への日本手話習得支援を強化しなければ、子どもたちに豊かな言語接触を確保することは困難であり（佐々木, 2014; Cummins, 2007）、母子間の有効なコミュニケーション手段の欠如は幼児期の言語発達、ひいては発達全体にとって多大な障害となりうる（Mayberry & Eichen, 1991）。その結果、一般的にろうの両親のもとに生まれたろう児（DOD: Deaf of Deaf parents）の方が聴の両親のもとに生まれたろう児（DOH: Deaf of Hearing parents）よりも手話言語発達の面において有利な状況にあり、（レーダーバーグ・ビール−アルヴァレス, 2015）、リテラシーの獲得においても DOD 児の方が有利であるとする報告も少なくない（Snoddon, 2008）。ただし、Strong and Prinz（2000）は手話の運用能力が高い保護者が養育するろう児は DOD であるか DOH であるかに関わらず高いレベルのリテラシーを身につけることを示しており、DOH 児の言語発達が必然的に遅延することが示唆されているわけではない。

2.3 母子間のコミュニケーションモードの不一致を解消するための取り組み

サス−レーラー（2015）は多くの DOH 児とその保護者が直面するコミュニケーション上の不一致問題を解決するための、手話言語に堪能な教師による早期からの言語支援を行う取り組みについて報告している。とりわけ、成人ろう者がろう児のいる家庭を定期的に訪問し、手話とろう文化を伝える米国ユタ州の試みや、カナダオンタリオ州で行われたろう児に対する手話と早期リテラシー教育支援は注目に値する。また、手話と書記言語のバイリンガル教育を行うスウェーデンのろう学校に設置された保育クラスの報告（オールソン, 2008）や、香港における手話バイリンガルコーエンロールメント（Tang, Lam & Yiu, 2014）なども革新的な取り組みとして学ぶべき点が多い。

特にろう児の萌芽的段階におけるリテラシー発達に目を向けると、研究の多くが絵本読みにおけるろう児とその親のインタラクションを扱っている（Mayer & Trezek, 2015, pp.7-8）。レーダーバーグ・ビール−アルヴァレス（2015）は家庭で保護者が子どもと一緒に本を読む頻度が子どもの言語発達と関連していることを指摘し、物語を読む際はほかの活動よりも言語がより複雑になる点にその理由を求めている（p.460）。

翻って日本の状況に目を向けると、就学前の母子コミュニケーションの促進のために日本手話による介入を行っている事例は極めて少なく、日本手話を使うことがろう児の発達に資するという点について研究者および教育関係者の間にコンセンサスが得られているとはいいがたい。このような状況のもと、日本手話での介入が乳幼児期の母子コミュニケーションに資することを報告した事例は管見の限り見当たらない。

3．研究課題

本研究の場となる乳幼児相談室では、コミュニケーションモードが一致していない聴母とろう児のコミュニケーションの促進に資するために、海外の事例でその有効性が確認されているものの日本ではまだ取り組み事例のない、日本手話による絵本読み活動を取り入れることにした。この活動では、1) ろう児の絵本読みに対する関心を育む、2) ろう者の絵本読みを共有することで母子ともに手話の運用能力が向上する、3) ろう者の絵本読みのやり方を聴母が学ぶことができる、という効果を期待できると考えたからである。本研究においては、ろう講師による絵本読みを聴母とろう児がともに楽しむ活動が、実際に母子コミュニケーションを促進するのか、そしてもしそうであるならばどのような面で促進するのか、ケーススタディの手法をとって詳細に観察する。

4．研究方法

4.1 研究参加者

本研究の参加者は乳幼児相談室に来室した母親とその子Ａ児である。Ａ児は、感音性難聴90 dB[4)]の女児であり、同居する両親と妹は全員聴者である。来校以前、親子とも日本手話に接触した経験は皆無だった。生後5ヵ月で初めて来室し、母親はその時点から日本手話を学び始めた。研究期間の年齢は0歳7ヵ月～2歳9ヵ月だった。

4.2 データ収集

本研究の調査期間は、2014年1月～2016年3月の2年2ヵ月間である。この期間内に、毎月1ないし2回、5分～15分程度、ろう講師及び手話に堪能な聴教師による絵本読みを合計34回行い、Ａ児の集中力に合わせて1～3冊の絵本を読んだ。この活動には毎回、母親が一緒に参加した。そのほかの参加者はいない。その中で2014年1月～2015年3月までは、Ａ児とろう講師・母親が正対し、絵本読みのみを行った。2015年4月～2016年3月は、机を挟んで、Ａ児とろう講師、聴講師が正対する位置で絵本読みを行った。ろう講師は、絵本の日本語文を日本手話に翻訳するのではなく、「サンタさんがいっぱいプレゼントを持ってきたね」など、絵本全体の印象を日本手話で語る方法により絵本を読んだ。その際、Ａ児に「これは何？」等と尋ねたり、次のページをちらりとみて「あれ？」等と発語したりして、Ａ児の反応を引き出した。また、ろう講師の

絵本読みに加えて、2歳7ヵ月時より、聴教師が動物の絵カードを用いて、指文字を導入し、日本語を扱う活動を始めた。具体的には、2音節の名前の動物（例：いぬ, ねこ, ぶた, わし等）の名前がひらがなで書いてあるカードをA児に提示しながら、聴教師が動物の名前を指文字で表出する手法をとった。A児に指文字をみせることを意図していたため、A児からの指文字の模倣は求めなかった。

4.3 分析の方法

まず、ろう講師による日本手話での絵本読みや関わりの活動をすべてビデオに記録した。この記録の中で、視線や手話による発話など、母子コミュニケーションの観点から着目すべき場面を抽出した。その結果、全34回の活動のうち、本研究では生後7ヵ月時、1歳5ヵ月時、1歳11ヵ月時、2歳7ヵ月時、の合計4回の活動における場面が抽出された。最終的に本研究の分析の対象とした活動における特徴的な母子コミュニケーション場面とその場面で使用されていた絵本教材を表1に示す。

表1　分析対象とした母子コミュニケーション場面とそこで使用された教材

観察時点	着目した母子コミュニケーション	分析対象	使用教材
生後7ヵ月時点 （2回目）	・講師と子の視線共有 ・母による講師のコミュニケーションストラテジー模倣	12秒	『あかあかくろくろ』 柏原晃夫 学研教育出版
生後1歳5ヵ月時点 （12回目）	・手話幼児語の表出 ・講師と子の視線共有 ・母と子の視線共有	18秒	『だるまさんと』 かがくいひろし ブロンズ新社
生後1歳11ヵ月時点 （21回目）	・手話の発語と発声 ・母への注意喚起 ・母と同じ手話表出 ・講師と子の視線共有	45秒	『おべんとうばこのうた』 さいとうしのぶ ひさかたチャイルド社
生後2歳7ヵ月時点 （30回目）	・指文字の表出 ・講師への手話の発語 ・母への手話の発語	40秒	自作絵カード

次に、この場面にみられるろう講師、子ども、母親の言動をトランスクリプト化した。トランスクリプトの表記は、田中・鹿内（2014）を踏襲して次の書式によった。

①日本手話の発語/　/、その日本語訳文（　）。
②音声日本語の発語「　」。
③日本手話の表記方法については白澤他（2002）を参照した。YHqは肯否疑問文、WHqは疑問詞疑問文を表示する表情が付加されていることを示す。nodは頷きを示す。PTは指さし（後に続く数字は指さしが示している人称を表し、PT1は一人称、PT2は二人称、PT3は三人称）を示す。
④指文字の表出〔FS　〕。

トランスクリプト化したデータの中で、A児の言語反応（日本手話・日本語）及びコミュニケーション発達に関わる行動がみられた場面を整理・分析し、記述する。

5．観察結果

5.1 7ヵ月時点：ろう講師とA児の視線共有の初出現

表2　7ヵ月時の活動

時間(分：秒)	講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:01	・ろう講師が右手人差し指でA児の右頬に触れる。		
00:02	**・ろう講師は、かがんで、A児と対面し、／魚　魚／と手話で言う。**		
00:03		・母親が、かがんで、／魚　魚／と手話で言う。	**・「あー、あー、あー」図1**
00:05	**・ろう講師が、より姿勢を低くして、A児の顔をのぞき込み、視線を合わせる。**		**・講師と視線が合う。図2**
00:06			・「あー、あー」
00:07	・講師が／魚　魚／と言う。		・絵本をみる。
00:09			・「あー、あー」
00:11	・講師が／歩く／と言う。		・絵本をみる。
00:12			・絵本に両手を伸ばす。

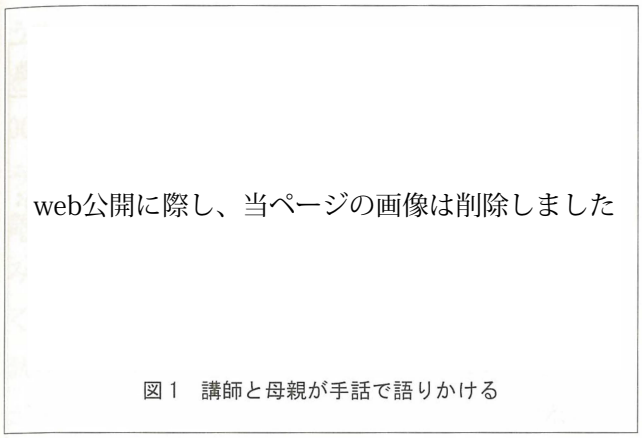


図１　講師と母親が手話で語りかける

00:02　ろう講師（右）は、体をかがめ、A児の顔の前で全指を揃えて前方に進ませる動きをして／魚　魚／という日本手話を表出した。母親（左）もこれに倣って体をかがめ、A児の視線を捉えようと試みながら／魚　魚／とA児にみせた。しかしこの場面ではA児は手話を見ず「あー、あー」と単純発声をした（図1[5)]）。

00:05　ろう講師は、より姿勢を低くして、A児の顔をのぞき込み、A児の視線を誘導し、その結果A児とろう講師の視線があった。これが記録されたビデオの中で初めてA児が他者と視線を共有した瞬間だった（図2）。



図２　講師とA児が視線を合わせる

5.2 1歳5ヵ月時点：A児による日本手話の発言が初めて確認された場面

表３　1歳5ヵ月時の活動

時間（分：秒）	教師・講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:01	**・（A児が頭をたたくのをみて）聴教師の音声「痛い、痛い」**	・母親はA児の右耳に補聴器をつける。	**・右手で頭を連続してたたき絵本をみる。図3**
00:02	・ろう講師が絵本を開く。・聴講師の音声「はい、じゃあね」		
00:03	**・ろう講師がページをめくり／苺／と言う。**		**・ろう講師をみる。図4**
00:05	・ろう講師がページをめくり／苺／と言う。		・絵本をみる。
00:07	・ろう講師がページをめくる。	・母親がA児をみる。	**・母親と視線が合う。図5** ・体を左右に揺らす。

時間(分：秒)	教師・講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:09	・ろう講師が、／苺／と言いながら、体を左右に揺らす。		
00:10			・ろう講師の顔をみながら、顔を左右に振る。
00:12			・聴教師をみる。
00:14	・ろう講師がページをめくる。	・母親はA児をみている。	・絵本をみる。
00:18	・絵本の内容に合わせてろう講師がおじぎする。		

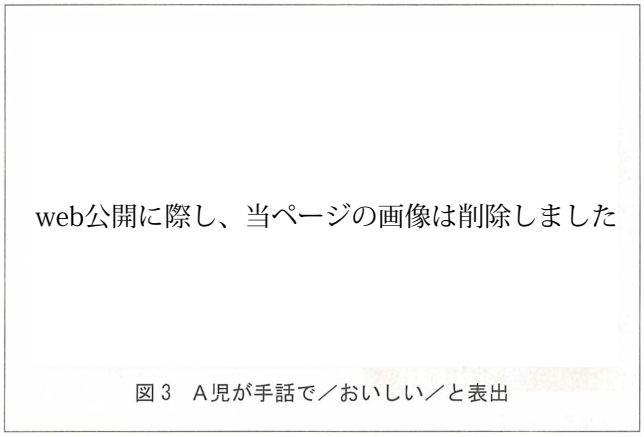


図3　A児が手話で／おいしい／と表出

00:01　絵本読み活動が始まってすぐに、A児が頭をたたくのをみて、聴教師（ビデオ撮影をしているため写真には写っていない）は、A児の手話による発話を音声化し、「痛い、痛い。」と言った。しかし、それは、／おいしい／の日本手話の幼児語であったことが後にろう講師とのビデオ確認により判明した。／おいしい／の手話ラベルは、利き手の掌を頬に当てて産出される。が、幼児の場合、肘を十分に曲げることが難しいため、頬ではなく頭をたたいて表出されることがあり、それは日本手話の幼児語の1つであるとこのろう講師は解説した。さらに、本相談室に通うほかのろう児が、大人から褒められた時に、／おいしい／と手話で言ったことから、ろうの幼児は／おいしい／を、「快、不快」のうちの「快」を表す語彙として代用しているとの推測が可能であるとろ



図4　A児がろう講師の顔を注視

う講師は付け加えた。従ってこの場面でＡ児は、絵本読みの意義を理解して、「期待感」を／おいしい／の語で表現したのではないかと解釈することができる。

00:03　A児は、ろう講師（左）がページをめくり、手話を表出するタイミングで、ろう講師の顔をみた（図4）。これは、絵本のストーリーが展開する時、読み手が手話で語りかけてくれることをA児が理解しているためだと考えられる。音声言語での絵本読み聞かせでは、子どもは、絵本をみたまま読み手の声を聞いており、読み手の顔をみなくてもストーリーを理解する。しかし、手話での絵本読みでは、通常、子どもが絵本と読み手の手話を交互にみることで内容を理解していく。そのため、読み手の膝に子どもが座ったり、並んで座ったりするのではなく、対面が基本となる。この場面でＡ児は、表1の活動とは別人のろう講師に対して、正面の位置から顔をみている。このことから、A児が特定の個人に対しての愛着からこの絵本読み活動を楽しんでいるのではなく、日本手話での絵本読み活動そのものに興味をもち、日本手話によるコミュニケーションのスタイルを習得しつつあることを読み取ることができる。

00:07　Ａ児は、ろう講師への注視を一旦やめ、振り返って母親の顔をみて視線を合わせた。母親も体を前のめりにしてＡ児との視線を合わせようと反応している。さらにＡ児はこの後、ビデオ撮影をしている聴教師とも視線を交わす（図5）。

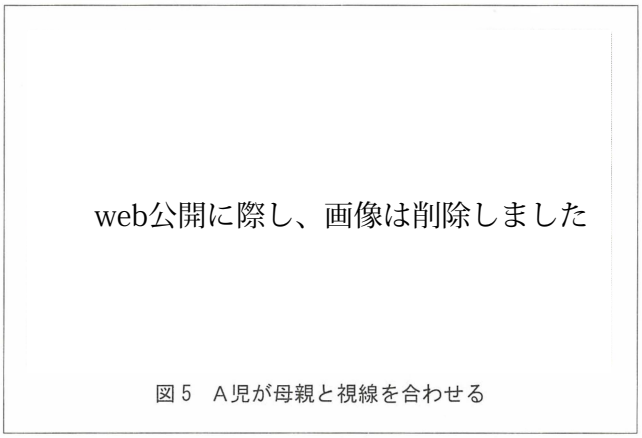


図５　Ａ児が母親と視線を合わせる

5.3 1歳11ヵ月時点：初めて接する日本手話語彙を習得する場面

表４　1歳11ヵ月時の活動

時間（分：秒）	講師の言動	母親の言動	Ａ児の言語反応および行動
00:01		・ろう講師をみて／ごま／手話^{WHq}／（ごまの手話は？）と尋ねる。	
00:02	・母親をみる。		・母をみる。
00:03	・母親をみて／ごま^{YNq}／（ごま？）と尋ねる。	・「ごま」と言う。	・ろう講師をみる。

時間 (分：秒)	講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:05	・母親をみる。	・ろう講師をみて頷く。	**・／ごま／と手話で表出しながら「あー、あー」と言う。図6**
00:06	・母親をみて／ごま／と言う。	・ろう講師をみる。	・ろう講師をみて／ごま／と手話で表出しながら「あー」と言う。
00:08	・母親をみて／家／黒 ^{YNq}／(家のは黒？）と尋ねる。	・ろう講師をみて／黒　ごま／と答える。	・ろう講師をみて「あー」と言う。
00:09	・母親をみて／ごま／と言う。		・ろう講師をみて／ごま　ごま／と表出しながら、「あー」と言う。
00:11	・母親をみて／白　ごま／と言う。	・ろう講師をみて／白　ごま／と言う。	・ろう講師をみて／ごま　ごま／と手話で表出しながら、「あー」と言う。
00:13	・母親をみて／使う　ない／(使わない）と言う。	・ろう講師をみる。	・母親をみて／ごま／と表出しながら「あー」と言う
00:14	・母親をみて／使う　ない／(使わない）と言う。		
00:16	・A児を指し、母親をみて／わからない／（Aちゃんはまだわからない）と言う。	・ろう講師をみる。	**・しかめ面で、母親をみて「あー」と言いながら、右手を伸ばしてテーブルを3回たたく。図7**
00:17	・母親をみて／普通　ごま／(ごまだけでいい）と言う。	・ろう講師をみて頷く。	
00:18	・母親を指す。	・A児をみる。	・ろう講師をみる。
00:19	・母親をみて／家　何 ^{WHq}／(家では何？）と尋ねる。	・ろう講師をみる。	
00:20			・母親をみる。
00:21		・ろう講師をみて／家／と言う。	
00:23	・母親をみて／家　ごま　黒白 ^{WHq}／（家では黒、白どちらのごま？）と尋ねる。	・ろう講師をみる。	・母親をみる。
00:24	・聴教師をみる。 ・聴教師が母親に「家ではどっちのごまですか？」と言う。		

時間（分：秒）	講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:25		・「あー」と言う。	
00:26	・母親をみる。	・ろう講師をみて／白白／と言う。	**・母親をみて／家／と言う。図8**
00:28	・母親をみて／白nod／（白なんだね）と言う。	・ろう講師をみて／ごま／と言う。	
00:29			・母親をみて／家／と言いおでこを掻く。
00:30	・絵本を指し／黒／と言い母親をみる。	・絵本をみる。	
00:32	・母親をみる。	・「あー」と言う。	・絵本をみる。
00:33	・母親をみる。	・絵本をみて「黒」と言う。	・両手で絵本に触れ、ろう講師をみる。
00:34	・母親をみて／無い／と言う。	・ろう講師をみて／黒／無い／（黒は無い）と言う。	・ろう講師に向け両手で絵本を押しやる。
00:35	・A児をみる。母親をみて／不要／（要らない）と言う。		・ろう講師をみる。
00:37	・母親をみて／白　黒　不要／（白、黒は要らない）と言う。	・ろう講師をみる。	・絵本から両手を離して、「あー」と言う。
00:38	・母親をみて／ごま／と言う。	・ろう講師をみて／ごま／と言う。	・「あー」と言う。
00:40	・A児をみて頷く。		・ろう講師をみる。
00:41	**・絵本のページをめくりながら、A児をみる。**	・絵本をみる。	**・ろう講師と目が合う。しかめ面で、ろう講師に／ごま／と言う。図9**
00:42		・A児をみる。	
00:43	・絵本をみる。・A児をみて「あー」と言い、／ごま／と言い、頷く。		
00:45	・A児をみて／終わり／（おしまい）と言う。	・絵本をみる。	・穏やかな表情で、ろう講師をみる。

この場面では絵本にでてくる「ごま」をどう手話で表現するのかわからない母親が聴教員の助けを得ながらろう講師に質問している。日本手話における／ごま／という語彙は成人のろう者の間では単独で使用するよりも／白ごま／もしくは／黒ごま／と明示す

ることが一般的であるのか、ごまの色に関するやりとりがろう講師と母親の間で交わされる。その後、ろう児の手話に対する理解が深いろう講師が、A児の発達段階上その区別が必要ないだろうという見解を示すなど、ろう講師と母親の間でかなり長いやり取りがある。A児はそのやり取りを横からみながら、自分も参加したいという様子をみせる。

00:05　A児は、この場で初めてみた／ごま／の手話ラベルを、即座に表出しながら、「あー」と発声した。今読んでもらったばかりの絵本には、ごまの絵が描かれている。母親（写真中央）の顔をみて／ごま／を表出しているが、母親はA児をみずに、写真左にいるろう講師と話している（図6）。

web公開に際し、当ページの画像は削除しました

図6　A児が手話ラベル／ごま／を表出

00:16　A児は、母親をみて、右手でテーブルを3回たたいた。これは、ろう者が使う注意喚起ストラテジーの1つである。A児の表情からは何としても自分に注意を向けてほしい必死さがみてとれる（図7）。

図7　A児が母親の注意を喚起する

00:26　A児は、母親が表出した／家／をみて、即座に、自分も両手指の先端を合わせて三角屋根を形作ることで／家／の手話を表出し、自分に注意を向けていない大人同士の会話に何とか参加しようとしている（図8）。

図8　A児が母親の表出した／家／を表出

00:41　ろう講師は、A児と

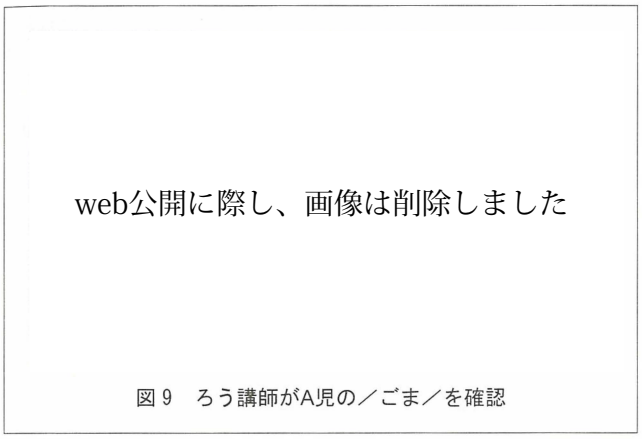


図９　ろう講師がA児の／ごま／を確認

視線を合わせ、／ごま／の表出をみた（図9）。そして、A児に、／ごま／の手話を返した。その瞬間、自分をみてほしいと必死にアピールし続けていたA児の表情が一変した。しかめ面から、穏やかな表情になり、／ごま／の手話の繰り返しも止まった。A児からの熱心な発話を大人がしっかりと受信し、受けとめたということをろう講師がA児にフィードバックしたことで、満足した場面である。

5.4　２歳７ヵ月時点：A児による初めての指文字の表出場面

表５　2歳7ヵ月時の活動

時間（分：秒）	教師・講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:01	・聴教師が、A児をみて〔FSわし〕と綴り、絵カードを提示する。		・両手で絵カードに触れる。
00:02	（ビデオ撮影をしているろう講師が／鷲／と提示する。）		
00:03	・ろう講師をみる。		・ろう講師をみる。
00:04	・A児をみて／鷲／と手話で言う。		
00:07	・A児をみて／鷲／と手話で言う。		
00:08			・聴教師をみる。
00:09	・A児をみて／鷲／と手話で言う。 ・絵カードを右手人差し指で指す。		・右手指を動かす。
00:10	・A児をみて〔FSわし〕と綴る。		
00:12	・A児をみて〔FSわし〕と綴る。		・聴教師をみる。

時間 (分：秒)	教師・講師の言動	母親の言動	A児の言語反応および行動
00:13	**・A児をみて〔FSわし〕と綴る。**		・〔FSわ〕と綴る。
00:14	・頷き、／鷲／と言う。		**・〔FSし〕と綴る。図10**
00:15	・A児をみて／鷲／と言う。		・聴教師をみる。
00:16	・A児をみて／固い／と言う。		・聴教師をみて／鷲／と言う。
00:18	・A児をみて鷲が飛ぶ身振りをする。		・絵カードをみる。
00:19			・聴教師をみて／痛い／「うー」と言う。
00:23	・A児をみる。		
00:25	・頷き、A児をみる。		・ろう講師をみて／飛ぶ　痛いPT3／（これ飛ぶよ、痛い。）と言う。
00:27	・ろう講師をみて／凄い／と言う。		
00:29			・絵カードをみる。
00:31			**・ろう講師をみて／鷲　腕　噛む　痛い／泣く／（鷲に腕を噛まれて痛い。泣く。）と言い「あー」と発声する。図11**
00:37	・A児をみる。		・立ち上がり、母親に向け右手を伸ばす。
00:39		・右手でA児の右手に触れる。	・立っている母親の右手に右手で触れる。
00:40	・A児をみる。		**・母親の右腕に接した状態で／噛む／と手話で、／痛い／と手話で言う。図12**

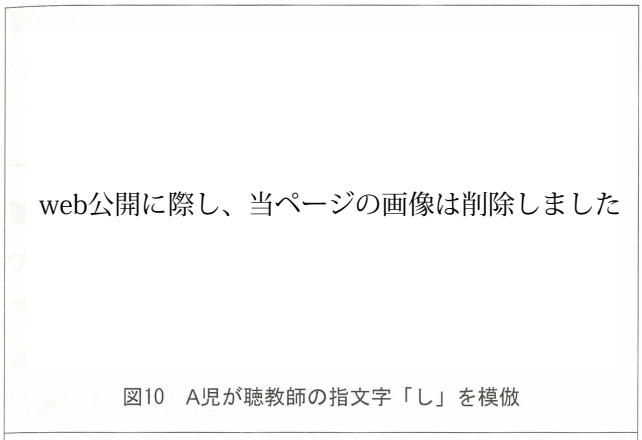


図10　A児が聴教師の指文字「し」を模倣



図11　／鷲　腕　噛む　痛い／泣く／を表出



図12　A児が母親に／噛む／／痛い／を表出

00:14　A児が、聴教師の提示をみて、第1指、第2指、第3指を伸ばして、指文字「し」を表出した（図10）。Padden（2006）によると、乳児期から手話に触れる子どもは、指文字も、初めは手話であると理解するが、次第に文字と対応する記号であることを認識していく。2歳7ヵ月当時のA児は、自分の名前、家族の名前、友だちの名前の順で、指文字とひらがなを対応させはじめていたため、すでにこの聴教師の指文字が記号であることを認識していた可能性がある。

00:31　A児が、ビデオ撮影をしているろう講師をみて、／鷲　腕　噛む　痛い／泣く／（鷲に腕を噛まれて痛い。泣く。）と言い、「あー」と発声した（図11）。

00:40　さらにA児は、母親を呼び、母親の右腕に接した状態で、／噛む／と言い、続けて／痛い／と言った（図12）。

4．考察

本研究で行った、日本手話を用いたろう講師による絵本読みの活動の中では、A児

の言語上・コミュニケーション上および絵本読みという認知的な活動に対する意欲を育むという観点上の目覚ましい発達がみられたのと同時に、母子間のコミュニケーションの観点から特筆すべき場面がみられた。以下にこれらの場面について考察する。

聴児においては通常生後1年～2年にかけて発達する協調的共同注意（コミュニケーションの相手と環境との間の意図的な注意の交換）の成立は、母語獲得において重要な基盤となる（内田, 2013, p.30）ものである。手話言語によるコミュニケーションでは特にこの協調的共同注意が重要な意味を持つため、ろうの母親は注意を自分自身に向けさせたり、より注意を惹きやすいような身振りをしたりするストラテジーを聴の母親に比べてより頻繁に用い、さらに子どもの注意の焦点を高頻度で確認することが報告されている（レーダーバーグ・ビールーアルヴァレス, 2015）。本研究でも、ろう講師は、生後7ヵ月のA児に対して、自らかがんで、A児の視界に入る、最も効果的な位置で日本手話をみせており、これは子どもと視線を合わせるためのろう文化に特徴的なストラテジーであると考えられる。このはたらきかけにより、ろう講師は、7ヵ月という月齢の乳児に対して、第2回目の絵本読み活動ですでに視線共有を成立させた。

一方、こうしたろうに特有のコミュニケーション技法にまだ習熟していない母親とA児の間には、この時点では視線共有はみられなかった。しかし、この母親は、我が子と視線共有を試みるろう講師の姿を模倣して身をかがめ、A児の眼前で／魚／の手話を産出した。ろう者は聴者に比べてより多くのモダリティのコミュニケーションを使うことが指摘されているが、聴の母親は日本手話の語彙力および運用能力ばかりでなく、ろう者特有のコミュニケーションストラテジー（鳥越, 2001）の利用においてもろう者より劣る。しかし、トレイシー・ケスター（2015）は早期に診断がなされたろう児を持つ聴の親たちもこうしたストラテジーを身につけることができると報告しており、本研究でもその可能性を垣間みることができた。

特に1歳5ヵ月時点の場面でA児は絵本読み活動に対する旺盛な意欲をみせたばかりでなく、母親へ視線を向けるという行動もみせた。母親も、そして聴教師も含めてこの場面にいるメンバーすべてを、自分にとって楽しい活動であるこの絵本読みに参加する一員として認識したと考えられる。このA児の情意発達の現れと言える行為に対し母親も、体をかがめてA児と視線共有をするというコミュニケーションストラテジーを使って応えており、この活動の喜びを母子間で共有できていることがみて取れる。

母親がろうのわが子に手話で話しかける際の重要なストラテジーをろう講師から学ぶことは、本研究でこころみた母親の日本手話及びろう文化習得を目指した支援活動の一つの成果と評価できるだろう。聴母親が、ろう児である我が子と「視線を共有」する

経験をもち、手話を用いて信頼関係を築くことの意義は極めて大きい。

1歳11ヵ月時点での、手話による側聞で大人の会話に参加しようとするA児の行動は、こうしたろう講師による日本手話の絵本読み活動への母子参加に研究開始当初は予想していなかったような副次的な効果もあったことを示している。この場面では日本手話話者のコミュニティーにおける主体的な構成員としてのアイデンティティの確立と、大人の会話の側聞を通じた語彙習得の二点がみられた。この場面でA児は、断固としてろう講師と母親の会話に参加し、その発言への注目を要求した。本人からの熱心な発話をろう講師がしっかりと受信し、受けとめたということをA児にフィードバックしたことに対し、A児は満足した様子をみせている。また、／ごま／、／家／の手話語彙をA児が大人同士の会話から読み取って自ら表出した場面から読み取れるのは、絵本読みを媒介としたろう講師と母親の会話が、語彙を増やす上で非常に重要な営みである側聞の機会を子どもに与え得ることを示す。音声言語での会話を側聞することが困難であるろう児は、周囲に手話環境がない場合、側聞によって語彙を増強する機会に恵まれない。本研究では、ろう講師による絵本読み活動によって、直接ろう講師から新たな語彙を教わるだけでなく、ろう講師、聴教師、母親といった周囲の大人たちの手話による会話を側聞する機会をもつことによって語彙習得の可能性を広げられることも確認できた。

さらに、2歳7ヵ月時点でみられた指文字表出に関わる場面についてみると、聴教師とのやり取りの中で、指文字で「わ」と「し」を表出したあと手話単語で「鷲」と表出し、記号としての指文字と意味を持つ手話単語の関係性を認識していることを示している。さらにA児はその指文字表出の後、聴教師の発話を受けて「鷲に腕をかまれて痛い。泣く。」というストーリーを生み出し、それを母親と共有しようとしている。この発話については、以下のような推測が可能である。聴教師が、鷲のくちばしが固いという意味で、／固い／と手話で発語したが、A児の理解語彙には、／固い／は無く、手形が同じで動きが異なる／痛い／があった。／固い／を／痛い／と読み違えたうえで、「鷲」と「痛い」を結びつけて考え、／鷲　腕　噛む　痛い／泣く／（鷲に腕を噛まれて痛い。泣く。）とストーリーを生みだしたのではないかと考えられる。ここでA児は振り向いて、妹をあやしながら立ってA児をみていた母親を呼び、自ら考えたストーリーを伝えた。この様な創造性に富んだ豊かな母子コミュニケーションは、絵本読み活動のような創造的な活動のもつ可能性を示唆するものである。

５．まとめ

本研究では、まず、Ａ児の絵本読み活動に対する興味が育まれていく様子が確認された。また、視線共有というろう者の特徴的なコミュニケーションストラテジーを聴母がろう講師から学ぶ場面も観察され、海外における同様の取り組みでの報告と共通する部分が確認された。「ごま」や「わし」のような、日常生活の中であまり頻繁に用いられない語彙の使用の場面などから、聴母・ろう児の両方がこの活動を通じ直接的に新しい手話語彙を習得する機会を得たことも確認された。

また、これらに加え、さらに二つの側面からろう講師による絵本読みへの母子参加の効用がみいだされた。ひとつは、ろう講師、聴教師と母親という三者が手話で会話するのを側聞することでろう児の間接的な手話語彙習得の機会を増やす、というもので、側聞の機会が聴の子どもに比べて圧倒的に少ないとされるろう児の語彙発達においては重要な意味を持つ。さらに、絵本の言葉に触発されて自分なりの創造的なイメージを作り、それを母親と共有した場面からはこうした活動がまさに聴母とろう児の間のコミュニケーションを深め、促進しうることが確認できたといえるだろう。

ただし本研究はあくまでもＡ児一人の観察を基にしたケーススタディであり、この研究においてみられたＡ児の発達および母親との関係の変化を一般化することはできない。従って今後の研究では同様の支援環境下にある同年齢のろう児についても観察を続け、本研究で得られた知見の信頼性と妥当性を高めていく必要がある。同時に、今後もＡ児の成長と共に観察を続け、より年長のろう児と聴母の母子コミュニケーションにおいて絵本読み活動がどのような効果をもたらしうるのか考察したい。

謝　辞

・本研究はJSPS 科研費16H00270の助成を受けたものである。
・本研究に協力いただいた研究参加者及びろう講師の岡村真理子氏、高橋直美氏に深謝する。
・本論文の完成にあたり、多くのアドバイスをいただいた査読者に感謝する。

注

1) 2016年12月22日に公表された学校基本調査の集計によれば、全日制および定時制の高等学校を卒業した生徒の54.7%が大学等の高等教育機関に進学しているのに対し、特別支援学校（高等部）を卒業した聴覚障害をもつ生徒の進学率は36.9%にとどまっている。

2) 本研究では、研究のデータ収集を行った学校名については「聾」と漢字で表記し、それ以外は「ろう」と表記した。
3) 日本の聴覚障害者が用いる視覚的コミュニケーション手段には日本手話と日本語対応手話がある。このうち日本手話は自然言語であり、日本語とは語彙も文法構造も全く異なる別の言語である（詳しくは赤堀・岡・松岡, 2012）。日本語対応手話は、中途失聴者にとっては習熟しやすいものの、手話言語の特性である重層性が欠落しているため（ウィルバー, 2015）、ろう児の母語としてその言語発達を支え得るものではない（Gibson, Small and Mason, 1997）。また、意味を表象するのではなく記号としてかなのように使用できるものとして指文字がある。
4) 耳介に接しなければ大声語を理解し得ないもの。厚生労働省身体障害者障害程度等級表より。
http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/shougaishatechou/dl/toukyu.pdf
5) 本研究では絵本読みの活動をVTRに記録すること、および、それをもとに論文化することについて保護者から承諾を得ている。日本手話では「表情」が重要な言語機能をもっているため、掲載写真にはモザイク処理を施さない点についても保護者から承諾を得ている。

引用文献

赤堀仁美・岡典栄・松岡和美（2012）「文法が示す自然言語としての日本手話」佐々木倫子編『ろう者からみた「多文化共生」―もう一つの言語マイノリティ』（pp. 118-140）ココ出版
ウィルバー・ロニー（2015）「言語のモダリティと構造―手話言語対手指システム」マーシャーク, M. ・ スペンサー, P. E. 編『オックスフォード・ハンドブック　デフ・スタディーズ　ろう者の研究・言語・教育』（pp.595-621）明石書店
内田伸子（2013）『発達心理学―言葉の獲得と教育』岩波出版
オールソン・ケーシュティン（2008）「スウェーデンのろう学校より」全国ろう児を持つ親の会編『バイリンガルでろう児は育つ』（pp. 120-131）生活書院
岡本夏木（2005）『幼児期―子どもは世界をどうつかむか―』岩波新書
カミンズ・ジム（2011）『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版
佐々木倫子（2014）「バイリンガルろう教育実現のための一提案 －手話単語つきスピーチからトランスランゲージングへ－」『言語教育研究』(5), 13-24.
サス - レーラー・マリリン（2015）「早期介入：出生から3歳まで」マーシャーク, M. ・ スペンサー, P. E. 編『オックスフォード・ハンドブック　デフ・スタディーズ　ろう者の研究・言語・教育』（pp.115-147）明石書店
田中瑞穂・鹿内信善（2014）「聴覚特別支援学校（聾学校）での早期教育における二言語環境整備」『北海道教育大学紀要教育科学編』65(1), 413-423.
鳥越隆士（2001）『手話・ことば・ろう教育』日本手話研究所
トレイシー・メグ、ケスター・リン・サンフォード（2015）「母子相互作用：移行期アプローチによるろう児の発達の理解」マーシャーク, M. ・ スペンサー, P. E. 編『オックスフォード・ハンドブック　デフ・スタディーズ　ろう者の研究・言語・教育』（pp.342-364）明石書店
廣田栄子（2013）「乳幼児難聴の聴覚医学的問題 早期診断と早期療育における問題点」『Audiology Japan』(56), 199-211.

レーダーバーグ・エイミー、ビール−アルヴァレス・ジェニファー (2015)「意味の表出―前言語コミュニケーションから語彙の形成まで」マーシャーク, M. ・ スペンサー, P. E. 編『オックスフォード・ハンドブック　デフ・スタディーズ　ろう者の研究・言語・教育』(pp.438-467) 明石書店

Cummins, J. (1979). Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research,49,* 222-251.

Cummins, J. (2007). The relationship between American Sign Language proficiency and English academic development: A review of the research. 『母語・継承語・バイリンガル教育研究』3, 75-94.

Goldin-Meadow, S. & Mayberry, R, I. (2001). How do profoundly deaf children learn to read? *Learning Disabilities Research & Practice, 16*(4). 222-229.

Gibson, H., Small, A., & Mason, D. (1997). Deaf bilingual bicultural education. In J. Cummins, & D. Corson, (Eds.), *Encyclopedia of language and education. Volume 5: Bilingual education.* (pp.231-240). Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

Mayberry, R., & Eichen, E. (1991). The long-lasting advantage of learning sign language in childhood: Another look at the critical period for language acquisition. *Journal of Memory and Language, 30,* 486-512.

Mayer, C., & Akamatsu, C. T. (2003). Bilingualism and literacy. In M. Marchark, and E. Spencer, (Eds.), *The Oxford handbook of deaf studies, language, and education.* (pp.136-147). New York: OUP.

Mayer, C. & Trezek, B. J. (2015). *Early literacy development in deaf children.* New York: OUP.

Padden, C. A. (2006). Learning to fingerspell twice: Young signing children's acquisition of fingerspelling. In B. Schick, M. Marchark, and E. Spencer, (Eds.), *Advances in the sign language development of deaf children.* (pp.189-201). New York: OUP.

Snoddon, K. (2008). American Sign Language and early intervention. *The Canadian Modern Language Review, 64*(4), 581-604.

Strong, M., & Prinz, P. (2000). Is American sign language skill related to English literacy? In C. Chamberlain, J. Morford, & R. Mayberry (Eds.), *Language acquisition by eye.* (pp.131-141). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Tang, G., Lam, S., & Yiu, C. (2014). Language development of Deaf children in a sign bilingual and co-enrollment environment. In M.Marchark, G.Tang, and H. Knoors, (Eds.), *Bilingualism and bilingual Deaf education.* (pp.313-341). New York: OUP.

Volterra, V., Iverson, J., & Castrataro, M. (2006). The development of gesture in hearing and deaf children. In B. Schick, M. Marschark, & P. Spencer (Eds.), *Advances in the sign language development of deaf children.* (pp. 46-70). New York: OUP.